

傷んだ木部を修理していきます

茶室棟の屋根は、雨水が入り込んだことにより木部が腐朽していました。傷んだ木材は、新しい木材に取り替えたり、既存の木材に新しい木材を継いで補修します。



腐朽が進んでいる茶室棟玄関の梁
既存の木材に新しい木材を継いで補修します。



茶室棟玄関の野棟（のむね）
梃斗積（のしづみ）から雨水が入りこんだことが腐朽の原因と考えられます。
傷みがひどいため、新しい木材に取り替えます。

玄庵の茅葺き材

玄庵は、これまでの茅葺きをすべて降ろし、新しく葺き直します。新しい茅は淀川河川敷で取れる葭（よし）材で、長さ1.7m 前後と1.5m 前後の2種類を、葺く位置に応じて使い分けていきます。



修理前の玄庵



葺き替え用の茅材

建築当初の瓦・谷川瓦について



上：玄関で使われていた谷川瓦の鬼瓦（左）と刻印（右）
下：玄関で使われていた谷川瓦の軒棧瓦

茶室棟の瓦から「谷川瓦株式会社」の刻印のある瓦が多数見つかりました。谷川瓦とは、大阪府泉南郡多奈川村谷川地域（現大阪府泉南郡岬町）で製作されていた瓦で、明治22年に「谷川瓦株式会社」を設立し、大正6年に「谷川瓦生（製）産組合」へと発展的に解消されました。茶室棟玄関や玄庵が明治44年に建てられたことを考えると、「谷川瓦株式会社」の刻印のある瓦は当初瓦であるといえます。

なお、茶室棟の瓦からは他にも「谷川瓦生（製）産組合」の刻印のあるもの、「京都杉友」「京都大佛」などの刻印のある京都の瓦、「明石八木」の刻印のある明石瓦、「三州犬塚」の刻印のある三州（愛知県）の瓦など、さまざまな種類の瓦が見つかり、屋根の葺き替え時期を推定するために、現在調査を進めています。

重要文化財・旧村山家住宅書院棟ほか3棟 保存修理事業 第2号
発行日 令和7年8月
発行 公益財団法人香雪美術館（神戸市東灘区御影郡家2-12-1）
編集・協力 （一財）京都伝統建築技術協会〔設計・監理〕
（株）安井奎工務店〔施工〕



バックナンバーは
こちらから閲覧可能です。



本事業は文化庁の補助金を得て実施しています。



重要文化財

旧村山家住宅書院棟ほか3棟 保存修理事業



茶室棟玄関修理の様子



公益財団法人香雪美術館が管理する重要文化財・旧村山家住宅では、令和6年7月より、建物の保存修理工事を進めています。

令和6年度は、茶室棟〔玄関・寄付棟、茶室玄庵（げんなん）、茶室香雪、及びその水屋〕の屋根瓦や銅板を取り外し、傷んだ木部を解体しました。

令和7年度は、木部を補修し、屋根を元通りに葺き直します。また、茶室の露地施設〔腰掛待合、雪隠（せっちん）〕、玄関棟の工事にも着手する予定です。

令和7年8月

公益財団法人香雪美術館

第2号

茶室棟の修理、進行中

茶室棟の茅や瓦、葺き土を降ろした後、土居葺き（薄い木片を重ねた下葺き）、さらにその下の野地板（垂木の上に打ち付ける屋根下地の板）を部分的に取り外しました。屋根を解体していく中で、建築年代や建築当初の姿、修理の方法などが少しずつ明らかになってきました。

◆茶室棟の玄関◆

野地板の大部分は過去の改修で取り替えられていましたが、中央部〔赤枠部分〕に当初材とみられる板が残っていました。瓦は、過半数が当初瓦〔裏表紙掲載「建築当初の瓦・谷川瓦について」参照〕で葺かれていました。



◆寄付◆

野地板は合板張りで、過去に屋根の全面葺き替えが行われていたことが判明しました。瓦は、軒瓦に当初瓦が使われていましたが、それ以外の瓦はほとんど新しい瓦に葺き替えられていました。



◆玄庵・茶室棟玄関との渡り廊下／玄庵・香雪との渡り廊下◆

玄庵と茶室棟玄関とを結ぶ渡り廊下（図中①）は、野地板が合板張りで、当初瓦が多く使われていました。玄庵と茶室香雪とを結ぶ渡り廊下（図中②）の野地板には細長い杉板が使われていて、寄付や茶室棟玄関とを結ぶ渡り廊下とは違う時代に葺き替えられていたことがわかりました。



◆茶室香雪◆

香雪の小屋組（屋根を支える骨組み）の部材はほとんどが取り替えられていて、過去に小屋組自体を変更するほどの大きな改修が行われていたことが判明しました。



建築年代がわかる棟札発見！



左：玄庵の棟札 右：茶室棟玄関の御幣

建物の新築・改修の際には、棟木を上げる「上棟式」に際して、施主や棟梁の名前と日付を記した「棟札（むなふだ）」や、「御幣（ごへい）」を棟木付近に取り付けることがあります。建物の建築年代が明らかになる貴重な史料です。

今回の保存修理工事で、玄庵から棟札（写真左）が、茶室棟玄関から御幣（写真右）が発見され、明治44年の建築であることが改めてわかりました。また、平成22年に玄庵の屋根垂木を取り替えた際に、建築当初の工事に携わったと思われる大工の名前と出身地が記された札も発見されました（写真上）。

当初の屋根はどんな屋根？～茶室棟の屋根葺き材～

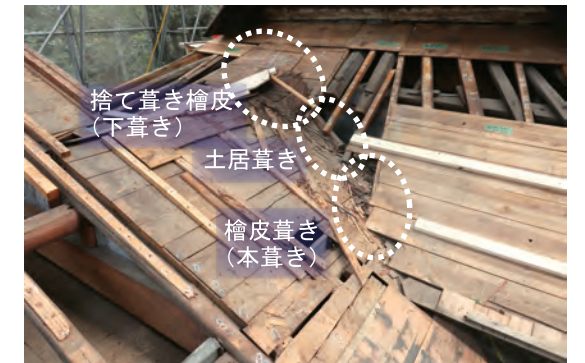
茶室棟の屋根は、香雪美術館が保管する当時の工事関係書類により、昭和51年から53年の間に大規模な葺き替え工事が行われたことが判明しました。また、屋根材を取り外していく中で、垂木が建築当初よりも高い位置に付け替えられている箇所が多く見られました。

さまざまな痕跡から、軒先に銅板を葺いた瓦葺き屋根の多くは、建築当初は檜皮葺きや柿（こけら）葺き〔杉や榎（さわら）などの薄板の重ね葺き〕であったと考えられます。



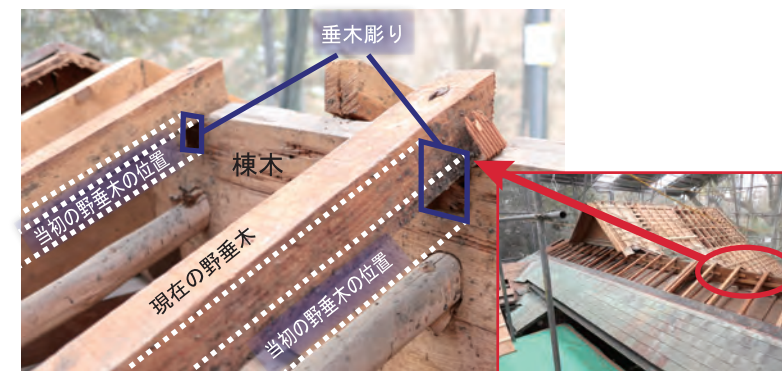
香雪水屋と書院棟を繋ぐ渡り廊下の屋根の下部

建築当初の屋根下地に竹釘が残っていました。以前は瓦葺きでなく、檜皮葺きか柿葺きの屋根だった可能性があります。



玄関と寄付の取り合い（接合）部分

屋根下地に建築当初の土居葺き、檜皮葺きが残っていました。〔白枠部分〕



玄庵と茶室棟玄関をつなぐ渡り廊下

現在の野垂木（外からは見えない屋根下地のための垂木）の下に、建築当初の垂木彫り（棟木に垂木を落とし込むために彫られた穴）〔青枠部分〕があります。檜皮葺きでは、檜皮を積み重ねて屋根の厚みを調整しますが、瓦と銅板では同様の方法で厚さを調整することができないため、屋根葺き材を瓦と銅板に変えた際に野垂木の高さを上げて屋根の厚みを調整したと考えられます。



寄付の東棟

軒先に高さを調整するための木材を入れ、野垂木の高さを建築当初の位置よりも上げています。渡り廊下と同様、屋根葺き材を変更したことにより屋根の厚みを調整したものと推測されます。